

PUB-NO: JP407194683A  
DOCUMENT-IDENTIFIER: JP 07194683 A  
TITLE: DEODORANT

PUBN-DATE: August 1, 1995

INVENTOR-INFORMATION:

NAME	COUNTRY
HAYASHI, SHINJI	
INT-CL (IPC): A61L 9/01	

ABSTRACT:

PURPOSE: To provide a deodorant possible to keep deodorizing action for a long time and to achieve sufficient deodorizing effect with little usage, by using botanical substance which contains coumalin, folic acid, abietic acid, hinokitiol, green tea flavonoid and other non-volatile matters by a specific ratio.

CONSTITUTION: A botanical substance containing coumalin about 5%, folic acid about 10%, abietic acid about 30%, hinokitiol about 5%, green tea flavonoid about 20% and other nonvolatile matters about 28% in weight is used as the deodorant component. This deodorant can keep deodorant action for a comparatively long time and achieve the deodorizing effect same as a conventional chemical deodorant. Moreover, it is completely no toxic to a human body since its effective component consists of botanical matters.

COPYRIGHT: (C)1995, JPO

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公 開 特 許 公 報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平7-194683

(43) 公開日 平成7年(1995)8月1日

(51) Int.Cl. <sup>6</sup>	識別記号	庁内整理番号	F I	技術表示箇所
A 6 1 L 9/01		R		

審査請求 未請求 請求項の数 1 F D (全 3 頁)

(21) 出願番号	特願平5-354042	(71) 出願人	594022404 奥秋興業株式会社 神奈川県横浜市神奈川区大口通37番地
(22) 出願日	平成5年(1993)12月28日	(72) 発明者	林 信次 神奈川県横浜市旭区上白根町762番地の2 株式会社横浜ネプロス内
		(74) 代理人	弁理士 渡谷 啓朗

(54) 【発明の名称】 消臭剤

(57) 【要約】

【目的】 長時間消臭作用を維持することができ、しかも少量で十分な消臭効果を達成できる消臭剤を提供する。

【構成】 クマリン7 g、葉酸10 g及びアビエチン酸30 g、そしてヒノキチオール5 g、緑茶フラボノイド20 g及びその他の不揮発分28 gを消臭成分とする。

## 【特許請求の範囲】

【請求項1】 クマリンを約7%、葉酸を約10%及びアビエチン酸を約30%、そしてヒノキチオールを約5%、緑茶フラボノイドを約20%及びその他の不揮発分を約28%の重量割合で含む植物性物質を消臭成分とすることを特徴とする消臭剤。

## 【発明の詳細な説明】

## 【0001】

【産業上の利用分野】 本発明は簡易トイレや生ゴミなどから発生する悪臭の消臭剤に関する。

## 【0002】

【従来の技術】 簡易トイレや生ゴミから発生する悪臭はきわめて不快なものであり、従来からこれらの悪臭を消去するためのいろいろな消臭手段が開発されていて、排泄物などの上に香料物質の薄膜を張って臭いを閉じ込めるマスキング手段や活性炭やゼオライトを用いて臭いを吸着する吸着手段が知られている。

## 【0003】

【発明が解決しようとする課題】 しかしながら、吸着手段による消臭では悪臭をことごとく吸着することが困難であって十分な消臭効果を期待できない。また、マスキング手段による消臭は吸着手段と比較して一時的にはすぐれた効果を発揮するが、薄膜はもろいために時間が経過すると、または排泄物などが新たに加わると破れてしまい、長時間消臭効果を維持することができない。このような問題点を解消するものとして、アンモニアやメルカプタン等の腐敗性悪臭物質と反応する消臭剤を用いた化学的消臭手段も採用されているが、消臭効率が悪く悪臭物質の量が多い場合には多量の消臭剤を用いなければならないため、経済性の上で問題を有している。

【0004】 そこで、本発明は長時間消臭作用を維持することができ、しかも少量で十分な消臭効果を達成することのできる消臭剤の提供を目的とする。

## 【0005】

【課題を解決するための手段】 この目的を達成するため、本発明者は植物性物質に着目し種々の植物性物質を用いて実験を行ってきたが、クマリンを約7%、葉酸を約10%及びアビエチン酸を約30%、そしてヒノキチオールを約5%、緑茶フラボノイドを約20%及びその他の不揮発分（各種テルペン類・各種ビタミン類）を約28%の重量割合で含む植物性物質を消臭成分として使用することにより本発明の目的が十分達成されることを見出した。

【0006】 クマリンは松、ひのき又は杉に比較的多く含まれ、アビエチン酸は松やニから抽出することができ

る。葉酸はほとんどの葉に含まれているが松の葉に比較的多く含まれている。そして、ヒノキチオールはひのき科植物、緑茶フラボノイドは茶樹から多く抽出することができる。その他の不揮発分にはパラフィンやワックス及びビタミンAなどが含まれる。

【0007】 本発明に用いる植物性物質は、松、茶などの葉や樹皮を適量配合した植物混合物をアルコール、アセトン又は水などの抽出溶媒を用いて抽出し、抽出液から溶媒を分離して取り出すことができる。得られた植物抽出物質に水などを適量加えて溶液型の消臭剤を構成することができるが、抽出溶媒が水である場合には植物抽出物質を含んだ抽出液をそのまま用い、必要に応じて適量の水などを加えて消臭剤を構成することもできる。本発明の消臭剤の型は溶液、ペースト又は粉末のいずれであってもよい。

## 【0008】

【作用】 消臭剤を直接腐敗性悪臭発生源に添加するか、または腐敗性悪臭発生源の下に散布又は配置しておく。

## 【0009】

【実施例】 黒松、赤松、えぞ松、熊笹、柿、モミ、樟、茶及びひのきの葉や樹皮を配合した植物混合物100gを、アルコール1000mlにひたして抽出する。得られた抽出液を蒸留してクマリン7g、葉酸10g及びアビエチン酸30g、ヒノキチオール5g、緑茶フラボノイド20g及びその他の不揮発分28gを得る。この植物抽出物質に400mlの水を加えて消臭剤を構成する。

【0010】 この消臭剤を簡易トイレに使用した結果を表1に示す。

【0011】 実験は当初10リットルの汚物水が留っていて、その後1日毎に6リットルの汚物水（尿90%、大便10%）が排泄される簡易トイレを使用して、臭気を強く感じる（表中○）、多少感じる（表中△）及びほとんど感じない（表中×）に区分して行った。表1は留っている10リットルの汚物水に400mlの消臭剤を添加し、24時間後に90mlの消臭剤を添加した場合、留っている10リットルの汚物水に300mlの消臭剤を添加し、24時間後に70mlの消臭剤を添加した場合、及び留っている10リットルの汚物水に200mlの消臭剤を添加し、24時間後に50mlの消臭剤を添加した場合を示す。24時間後に添加したのちは添加を行っていない。

## 【0012】

## 【表1】

添加量	添加前	添加時	24時間 経過後の 添加前	24時間 経過後の 添加後	48時間 経過後	60時間 経過後	72時間 経過後
400m l 90m l	○	×	×	×	×	×	○
300m l 70m l	○	×	×	×	×	△	○
200m l 50m l	○	×	△	×	△	○	○

【0013】

【発明の効果】以上説明したように本発明の消臭剤は比較的時間消臭作用を維持し、しかも少量で従来の化学\*

\* 的消臭剤とほぼ同程度の消臭効果を達成するものであり、さらに植物性物質を有効成分とするために人体に対して全く無害である。